

巻頭言

父の背中

小林 俊雄

あまり若い頃の話をするのがなかった父だが、小さかった私に、鹿児島県の出水飛行場^{いずみ}で爆撃を受けた話をしたことがある。父は、7人兄弟の3番目で、海軍へは志願をしたらしい。最初に選んだ職が軍人だった。軍隊へはいわゆる赤紙で召集されるものと思っていたから意外であった。搭乗する戦闘機が不足し、出撃を待つ中、爆撃で飛行場が破壊され終戦となったようだ。

その後、婿養子となり私が生まれる。税務署勤めで帰宅は遅く、子どもの進路や職業について特に語ることも、怒ることもない。ただ、黙々と働き、兄弟やその子どもたちの相談相手となっていた。私が教員をやめて遠隔の地に行こうとした時のことだ。「俺も爺さんも家族や親戚のことを考えて働いてきたのに、お前はそれを捨て、教員も捨てて、好き勝手にするつもりか。」怒らない父が怒った。父の生き方が頭を駆け巡り、結局教員を続けることにした。7人兄弟の最後に父が逝った。楽しいことはあったのだろうか。

85年の人生で最後に話したのは、息子が小学生の時のことだった。それも、まるで見ていたかのように、「俊雄は、小学生の時に朝礼台の上から、みんなの前で『泣いた赤鬼』の話をしたんだ。」

四月、また学校へ新入生がやってくる。